

## チェコのコメニウス教育博物館

井ノ口 淳三\*

### 要旨

17世紀の教育家コメニウス (J. A. Comenius, 1592 - 1670) は、現在のチェコ共和国東部のモラビア地方の出身である。彼の名前は、チェコの町の通りや広場、学校などにも付けられている。本稿ではチェコの教育博物館の中からコメニウスの名前を冠したものを取り上げ、それらの特徴について考える。

### キーワード

コメニウス教育博物館、ウヘルスキー・プロト、プシェロフ、プラハ

### 1. モラビア地方のコメニウス教育博物館

17世紀の教育家コメニウス (J. A. Comenius, 1592 - 1670) は、「博物館情報・メディア論」のテキストにも紹介されているように、広義の博物学にも連なる人である (たとえば、日本教育メディア学会編『博物館情報・メディア論』2013年、ぎょうせい、25ページなど)。彼は、現在のチェコ共和国東部のモラビア地方の出身である。そして「民族の教師」と呼ばれていたし、現在も200コルナ紙幣の肖像に描かれている。彼の誕生日である3月28日は、「教師の日」と定められ、コメニウスの名前は、チェコの町の通りや広場、学校などに付けられている。本稿ではチェコの教育博物館の中からコメニウスの名前を冠したものを取り上げ、それらの特徴について考える。

誕生日が何日かということについては学説の異なることのないコメニウスではあるが、生誕地が確定していないのは不思議なことである。現在はチェコ東部のモラビア地方の3つの小さな町が生誕候補地として知られている。その1つであるコムニャー Komňna は、コメニウスのチェコ語名であるコメンスキー Komenský という名前の由来の土地であるとされている。だが、町には彫像と物置小屋のような記念館だけしか存在していない。この彫像を見るだけなら、インターネットでも可能である。しかし、コメニウスの家族が住んでいた土地がどのような所であったのかを理解するには、やはり現地を訪ねることが必要である。なぜならコム

ニャーは大変交通不便な場所にあり、プラハから公共交通機関だけで現地へ行くには、途中ブルノかどこかで1泊しないとたどりつけないような場所だからである。

2016年9月に長年の願いがかなって生誕候補地の1つを訪ねた時は、コメニウスの家族がいかに不便な場所に住んでいたかを実感できた。コメニウス名称の小学校兼幼稚園の建物も小さいものだった。帰途は最寄りのバス停までヒッチハイクをしたが、乗せてくれた中年男性との会話から、彼がコメニウスを郷土の誇りだと思っていることが伝わってきた。



コムニャーのコメニウス記念館

2つ目の候補地は、ニヴニツェ Nivnice で、ここにはコメニウスの父親が営んでいた水車小屋の建物が残されている。

\* 追手門学院大学国際教養学部

以前は内部を見ることができたのだが、現在は民家として使用されており、中へは入れてもらえなかった。「フェイスブックの写真をみてください」という若夫婦の話に時の流れを感じた。

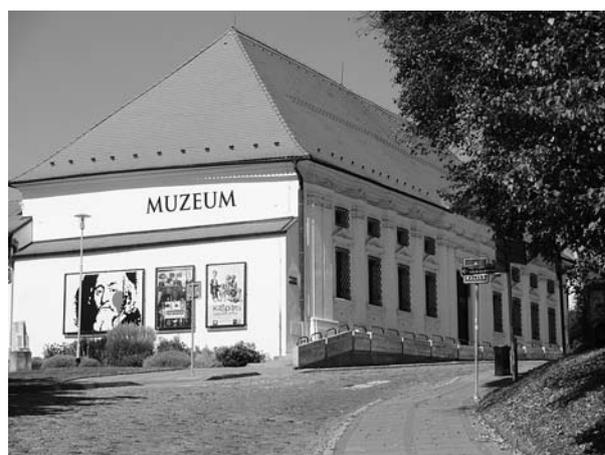


ニヴニツェのかつての水車小屋

前に見たはずの郷土博物館も見当たらず、付近の人に尋ねたところ「なくなった」との返事であった。以前に来た時は、この土地の風習として赤ん坊を布でグルグル巻きにするスウォドリングの展示があったのを覚えている。『世界図絵』（1658年）の挿絵にも描かれていた風習がここでは100年ほど前まではまだ残っていたことをその展示から知った。

3番目の候補地であるウヘルスキー・プロト Uherský Brodにもコメニウスの家族が住んでいた建物が残されている。ニヴニツェの建物と同様に、壁のプレートには「ある説によれば、ここにコメニウスの家族が住んでいた」として、断定的ではない謙虚な説明文が書かれていた。以前は、ニヴニツェを有力と見る研究者が比較的多く、私もそのように書いていた。それはコメニウスがドイツのヘルボルンに留学していた際の署名が根拠となっていたが、近年はウヘルスキー・プロト説をとる研究者もドイツを中心に増えている。いずれにしても仮説の段階にとどまっている。

さて、この建物の近くにはコメニウス博物館があり、充実した展示を見ることができる。この博物館は、コメニウス関係の常設展示、郷土に関連した常設展示、そして折々の特別展という形で3つのセクションに分かれている。また、各地の教育博物館にしばしば見かける過去の教室の展示は、2016年9月に訪ねた時には改装中で、2017年3月にリニューアル・オープンするとのことであった。



ウヘルスキー・プロトのコメニウス博物館

1992年のコメニウス生誕400年を記念した国際会議が当地で開催された際にこの博物館を初めて見学した。それ以後何度も訪ねているが、展示の基本的な構成は変わっていない。波乱に満ちたコメニウスの生涯を滞在場所の移動に基づいて時期区分し、それぞれの場所における彼の活動の展示にかなりのスペースをとっている。また、木彫や石膏などさまざまな材料と手法で製作されたコメニウスの像がコーナーごとに置かれている。この種類の多さは他の博物館を圧倒している。

コメニウス関係の著作の展示にも1部屋があてられており、私の翻訳した『世界図絵』も見開きで置かれている。けれどもこのコーナーにあるのは所蔵の一部であり、大半の著作は隣接する研究所の書庫に保管されている。

ここでは研究活動も盛んに行われており、研究誌を毎年刊行している他に隔年でコメニウス研究の国際会議を開催している。

この博物館の中庭には日本庭園があり、それはウヘルスキー・プロトと姉妹都市である群馬県のみなかみ町（旧月夜野町）の提供によるものである。ここへは日本から庭師が定期的に手入れに来ている。

## 2. プシェロフのコメニウス博物館

コメニウスは、オロモウツ近郊のプシェロフ Pířerov にあるチェコ兄弟教団のラテン語学校で学んだ。そしてドイツへの留学から帰国後は、その学校の教師兼牧師となった。それを記念してこの町にも博物館と銅像がある。

博物館の建物は元の貴族の館であり、駅前から旧市街に入り、ゆるやかな坂道を登ったところにある。博物館

の前にある大きな像をコメニウスと間違いやすいが、これは同じくプシェロフ出身の宗教改革者ヤン・ブラホスラフ (J. Blahoslav, 1523 – 1571) であり、博物館には彼の関係の展示もある。彼は新訳聖書のチェコ語訳に貢献した。



プシェロフのコメニウス博物館

この博物館ではウヘルスキー・プロトの博物館と同じく研究活動も盛んである。私も所蔵書を閲覧したが、貴重な書籍は金庫に保管されている。そして閲覧室では、入退室の時刻だけではなく、気温と湿度も記録するようになっている。この博物館は出版活動にも積極的で、単行本以外にも小冊子を多数発行している。前館長のヒーブル博士からは、ここを訪ねる度にいろいろな刊行物を頂戴した。

プシェロフから近いフルネック Fulnek でもコメニウスはチェコ兄弟教団の牧師を務めた。この小さな町の広場のそばに彼とその家族が住んでいた教会があり、中庭に銅像が立っている。その表情は数ある像の中でも最もおだやかで、見る者に安らぎを与える。だが、新婚生活もつかの間、彼は妻と2人の息子を病気で亡くした。



フルネックの教会

この教会の内部が公開されており、コメニウスが住んでいた当時のままの間取りを知ることができる。家具や子ども用の木馬なども展示されている。コメニウスにゆかりの品の展示スペースは常設であるが、2階は特別展用として活用されている。

### 3. プラハの国立コメニウス教育博物館

コメニウスはプラハ Praha に滞在した形跡はないが、1614年にドイツへ行く途中に立ち寄ったと伝えられる。しかし、プラハの国立コメニウス教育博物館は、その規模と展示内容などから見てチェコを含むヨーロッパ各地のコメニウス博物館の中でも注目すべき博物館である。プラハ城から降りてきた旧市街の中にあるので、訪ねやすい立地である。

1979年に初めてチェコを訪ねた際にはコメニウス博物館は、まだ存在していなかった。当時は「哲学の間」と「神学の間」という2つの荘厳な書庫で知られるストラホフ修道院の敷地内にあった文学博物館の1室でコメニウス関係の展示を見ることができた。その後現在のコメニウス博物館の近くの上院議会の建物内に移転した。その期間は短くて、やがて現在の場所に移転したが、訪ねる度に隣接の建物に展示スペースが拡張しており驚かされる。そして今では簡素な喫茶スペースも設けられるようになった。

コメニウス関係の著作や写真パネルの展示、古い教室の再現や教材の展示などは、他の教育博物館と共通しているが、ここでは動画映像を見るコーナーも比較的早くに設けられていた。この博物館ではチェコにおける教育の歴史がわかるように展示が工夫されている。また、写真パネルの中には、国際学会に参加した際の私の姿もある。



プラハのコメニウス博物館

これまで見てきたウヘルスキー・プロト、プシェロフ、プラハのそれぞれのコメニウス博物館の前の館長や現在の館長とは、1992年のコメニウス生誕400年を記念して開催された大規模な国際学会でお会いして以来のおつきあいで、貴重な文献の閲覧や複写にも便宜をはかっていただき感謝している。

#### 4. その他のコメニウス博物館

チェコには小さな博物館にもコメニウス関係の展示がある。ブルノ近郊のクラリツェ Kraljice にある聖書記念館は、ここで聖書のチェコ語訳が印刷されたことを記念して建てられた博物館である。この建物の1つの階はコメニウス関係の展示で占められていて、コメニウスに関わりのあった人物の肖像画が大きく展示されている。



クラリツェの聖書記念館の展示



ビーラー・トシュメシュナーのコメニウス記念館

さらにコメニウスが宗教上、政治上の理由から弾圧され、国内逃亡中に立ち寄った場所にもコメニウス関係の展示をしている記念館がある。たとえば、ビーラー・トシュメシュナー Bílá Třemešná やホルニー・ブラーナ Horní Branná である。

ビーラー・トシュメシュナーは、プラハから鉄道で北へ向かって3時間以上かかる所に位置している。10月末の車窓は紅葉で美しかったが、途中から雪が降ってきたのには驚いた。思いがけない10センチほどの積雪の中、インターネットで調べたチェコの地図 <https://mapy.cz/> を頼りに記念館を探して歩いた。30分ほどしてようやく中へ入れた時はほっとした。小さいながらも、この付近の村や町とコメニウスとの関係を示す展示は、他の博物館では見られないものだった。一般には公開していない2階も見せてもらったが、コメニウスの胸像が幾つも置かれていた。2階は未整理の資料を保管している場所のようだった。



ホルニー・ブラーナの記念館

ビーラー・トシュメシュナーへ行ったのは2012年のことだが、2016年にはホルニー・ブラーナを訪ねた。ここへはプラハからバスで行ったが、やはり3時間以上かかる不便なところだった。バス停を降りてからコメニウスの潜んでいた場所にたどりつくまで30分ほど歩いたが、わかりにくい場所だった。しかし、土地の有力者の屋敷は、建物が庭を取り囲むように配置されていて、ここなら追手が探しに来てもすぐには見つからないだろうと思えた。

以上チェコのコメニウス関係の博物館を駆け足で見ってきたが、コメニウスの展示はヨーロッパ各地の博物館でも見ることができる。たとえば、スロヴァキアのブラチスラヴァ Bratislava とレヴォチャ Levoca の教育博物館、ハンガリーのサーロシュパタク Sárospatak、ドイツのヘルボルン

Herborn、オランダのナールデン Naarden、ポーランドのレシュノ Leszno などの郷土博物館である。このように6つの国の博物館で展示される人物は、きわめて珍しい。このこ

とからもコメニウスが各地に残した足跡を知ることができるのである。

#### 引用・参考文献

- コメニウス（1988）井ノ口淳三訳『世界図絵』ミネルヴァ書房、および（1995）平凡社。  
井ノ口淳三（1998）『コメニウス教育学の研究』ミネルヴァ書房。  
井ノ口淳三（2016）『コメニウス「世界図絵」の異版本』追手門学院大学出版会、丸善出版発売。  
Markéta Pánková ed. :The Legacy of J. A.Comenius. Pedagogical Museum of J. A. Comenius in Prague. 2010.

本稿に関連するホームページを参照されたい。

- ウヘルスキー・プロトのコメニウス博物館 <http://www.mjakub.cz/>  
プシェロフのコメニウス博物館 <http://www.prerovmuzeum.cz>  
2017年2月に特別展を参観した際の記事がアップされている。  
プラハのコメニウス教育博物館 <http://npmk.cz/> または [www.pmjak.cz](http://www.pmjak.cz)

本稿は、日本学術振興会の科学研究費（課題番号 26381052）の助成を受けて行われた研究成果の一部である。